

平塚らいてうと成瀬仁蔵 2 — 再会し、共に歩む、らいてうと成瀬 —

片 桐 芳 雄*

Hiratsuka Raiteu and Naruse Jinzo, 2 : Meeting again and Walking together

Katagiri Yoshio

1. 青鞥創刊

1908年3月24日夜、那須塩原の尾頭^{おがしら}峠で迎えた夜のことを、平塚明^{はる}は自伝『わたくしの歩いた道』で次のように書いた。

この夜、この峠の頂で、この眼で見た月光のなかに照らしだされたまばゆいばかりの水の山々の大パノラマ！ 荘厳、華麗な限りをつくした大自然の光の芸術は、私の心に深く刻まれて、一生忘れることのできない至聖、至美なるものの一つとなりました。透明な暗碧の夜空から音もなく落ちる幾筋もの滝のようにかかる遠くの連峯、その大傾斜、大豁谷が反射する明暗限りない光の複雑さ。ダイヤを、真珠を、オパールを無数に蒔き散らしたような近くの氷雪の山々。水晶の大宮殿のまっただ中にすわった私は、何ともいいようのない有頂天な幸福感にひたっていました。そして命をかけてきた自分がわかったような満足感を同時に味わいました⁽¹⁾。

しかし東京に戻ってみると、ひたすら下劣な、好奇の眼にさらされた明は、「家庭からも、世間からも離れ、雑音の世界を遠ざけて、ただひたすら一人きりになって、自分を見つめ、心ゆくばかり自分と語りた⁽²⁾」と思った。そして9月初め、高等女学校時代の旧友が住む信州に向かった。松本市郊外の、山がちな村の養鯉所の奥座敷を借り、12月半ばまで、読書に明け暮れる独居生活をつづけた。

12月に帰京後は、禪の修行を再開し、神田の正則英語学校に入学して英語の勉強も始めるとともに、図書館通いに明け暮れた。そして、生田長江の家などを訪ねているうちに、生田から、女性だけの文芸雑誌を刊行することを熱心に勧められるようになった。明は、なかなかその気になれなかったが、その話を聞いた、明の姉・孝^{たか}の親友で日本女子大学校国文学部出身の保持^{やすもちよし}研子が、すっかり乗り気になった。

明と保持は、雑誌発行の趣意書や規約を作成し、雑誌名は、「ブルー・ストックング」の訳、「青鞥」とすることにした。かくて1911年6月1日、保持の同期の中野初子と木内錠子^{てい}、それに明の高女時代の知り合いの妹・物集^{もずめ}和子に明自身を加えた5人で、物集邸で発起人会を開いた。かくして同年9月、明の発刊の辞、「元始女性は太陽であつた。— 青鞥発刊に際して—」を掲載する『青鞥』第1号が刊行された。

明は、刊行が押し詰まった8月の夜、この発刊の辞を、「深夜、自室に静座後、夜明け頃までに一気に書き上げた⁽³⁾」。そして執筆者名は、父母に気兼ねして本名を避け、秋に滞在した信州を思い浮かべつつ、大好きな鳥、雷鳥に因んで「らいてう」とした⁽⁴⁾。

「元始、女性は実に太陽であつた。真正の人であつた。／今、女性は月である。他に依つて生き、他の光によつて輝く。病人のやうな蒼白い顔の月である。⁽⁵⁾」で始まるこの文章は、「新しい女」を宣言する文章としてあまりに有名であるが、らいてうは

* 日本女子大学名誉教授

『道』に、次のように書いている。

ずいぶん稚拙な、恥かしいものであり、かつ意識的でない部分もありますが、とにかく、『青鞥』発刊の際の自分の心持、若い日の張りつめた自分の魂の息吹が、何ものの抑圧も受けずにここに吐露されており、またそれが、私自身は、ぜんぜん予期も、予想もしなかったことですが、同じ時代の若い女性の魂をゆり動かすことになったのでした⁽⁶⁾。

そしてらいてうは、16頁にわたる発刊の辞を、以下のように結んだ。

最後に今一つ、青鞥社の社員は私と同じやうに若い社員は一人残らず各自の^{ひたすら}潜める天才を発見し、自己一人に限られたる特性を尊重し、他人の犯すことの出来ない各自の^{ママ}天職を全うせむ為に只管に精神を集中する熱烈な、誠実な真面目な、純朴な、天真な、寧ろ幼稚な女性であつて他の多くの世間の女性の団体にともすれば見るやうな有名無実な腰掛つぶしは断じてないことを切望して止まぬ私はまたこれを信じて疑はぬものだ⁽⁷⁾と云ふことを云つて置く。

烈しく欲求することは事実を産む最も確実な真原因である⁽⁷⁾。(傍点・片桐)

青木生子は、発刊の辞にある「潜める天才」や「精神集注」の語は、成瀬仁蔵が実践倫理講話の中で何度も使っていた、と指摘している。まさに「天職」等とともに、「これらのキーワードこそ、明らかに成瀬の実践倫理講話の思想から生まれてきたもので、まるで成瀬の言葉そのものである」のであった⁽⁸⁾。

『青鞥』は、特に若い女性たちに、「予想外の反響⁽⁹⁾」をもって迎えられ、社員になることを希望する者も現れた。尾竹紅吉(富本一枝・ベニヨシとも)もその一人であった。

画家の娘であった尾竹が面白がって書く編集後記は、「五色の酒」や「吉原登楼」などのゴシップを生み、新聞は、「新しい女」の到来、と騒ぎ立てた。

このような事態に挑戦するかのやうにらいてうは、『中央公論』1913年新年号の特集「閨秀十五名

家一人一題」に、「新しい女」と題する一文を書いた。ここでらいてうは、自ら、「自分は新しい女である」と宣言するのである。

自分は新しい女である。

少くとも真に新しい女でありたいと日々に願ひ、日々に努めてゐる。真に、しかも永遠に新しいのは太陽である。

自分は太陽である。

少くとも太陽でありたいと日々に願ひ、日々に努めてゐる⁽¹⁰⁾。

らいてうは、「発刊の辞」の「元始、女性に太陽であった」を展開して、「自分は太陽である」と述べた。そして、男性を主体に築かれた旧道徳や旧法律を破壊し、「新しい女性」によって新道徳や新法律が創造されねばならないと説く。ここに、自己探求に沈潜していたらいてうの眼差しが、外部に向かい始めたことを示している。

新しい女は^{ただ}昔に男の利己心の上に築かれた旧道徳や法律を破壊するばかりでなく、日に日に新たな太陽の明徳を以て心靈の上に新宗教、新道徳、新法律の行はれる新王国を創造しやうとしてゐる。

実に新しい女の天職は新王国の創造にある。さらば新王国とは？ 新宗教とは？ 新道徳とは？ 新法律とは？

新しい女はいまだそれを知らない。

只新しい女はいまだ知られざるもののために、自己の天職のために、研究し、修養し、努力し、苦悶する⁽¹¹⁾。

同年2月15日、「青鞥社第一回公開講演会」が、満員の聴衆を集めて、神田のキリスト教青年会館で開かれ、らいてうは閉会の辞を述べた。この講演会の案内は、桜楓会機関紙『家庭週報』にも掲載された。

そして3月3日、成瀬仁蔵が、前年8月に出発した欧米巡遊の旅から帰京した。らいてうは、新聞に掲載された成瀬の帰国談を批判する「世の婦人達に」という一文を書いて『青鞥』3巻4号に掲載した。

2. 「世の婦人達へ」—成瀬仁蔵批判

らいてうは、次のように述べた。

先頃或新聞に、今度帰朝された成瀬校長の談話として記された記事の中に大要こんなことが書いてありました。それは、向ふでは女子職業教育が盛んだが、日本の女子教育は皆良妻賢母主義をとつてゐるのはよろこばしいことだ。(中略)又此頃日本では新しい女が騒がれてゐるやうだがあれはお転婆でいけないといふやうなことも一寸見えた様でした⁽¹²⁾。

そしてらいてうは、「信用を置くにも足らぬ新聞の記事などを捕へて、しかも校長に親しく接する機会を久しく失つてゐた私が、只あれ丈の^(ママ)記事に対して、とかくのことをいふのは甚だ軽卒の罵を免れない様にも考へますが」と留保しつつ、次のような厳しい言葉を述べた。

私は、私の尊敬する女子教育家の言葉として誠に遺憾に堪へませんでした。時流を抜いた熱誠な校長も最早老い込まれたのではないか。老いてはあまでも俗論に媚びねばならぬのかとも悲しましました。校長の所謂人格教育から見て職業教育は成程理想的なものではないでせう。けれど今日の我国のあの憐れむべき良妻賢母主義の女子教育を何となさいますか。殊に私共一世人は新しい女と呼んでゐる一に対して、私共の内に起つて来た新生命に対し、其のやみがたき要求に対して、何等の理解もなく、又理解しやうとする気もなく、無知な感情的な多数俗人の偏見と共に、新しく勃興せむとするものに何かとケチをつけたがる野次馬の卑しい言葉と共に「お転婆」だとか、女子の美德を害するとかいつたやうな種類の無反省な言葉をもつて平気に評し去らうとするのは、日本に於ける唯一の女子大学の校長としては、あまりに、不明な、あまりに無責任なことではないかと思ひました⁽¹³⁾。

もっとも、当時の新聞に掲載された成瀬の帰国談を見ると、各種の資格教育に力点を置いた欧州の女

子高等教育と、日米の、人格教育に力点を置いた教育を比較してはいるが、必ずしも後者が優れていると述べているわけではない。それぞれ一長一短がある中で、むしろ成瀬の強調しているのは、日本の女子高等教育の遅れ、である。

例えば、帰国翌日の3月4日付『朝日新聞』では、欧州の女子高等教育は、「百人が百人徒らに職業を求むる資格を獲ん為に教育を受けると云ふ跡が歴々たるものがある」り、「日米の女子高等教育に比して優つた点も少くはないが非常に劣つたところも可成多い」としたうえで、「然し二十年前自分が欧米の女子高等教育を視察した時代に比しては各国ともに長足の進歩で漸次女子高等教育の不必要を唱へる固陋者流の跡を断つて仕舞つた点などは自分として羨望に堪へぬところであつた。」と述べているのである⁽¹⁴⁾。

また同日付の『読売新聞』では、「〔(米国の・片桐) 大学は種々の学科を教授する外に最近にては新聞学図書館学等の講座を設け新聞雑誌界に於て婦人の活動する状(、片桐) 実に目醒ましいものがある〕り、「又婦人の人格教育に就いても驚く可き発達を遂げたのには少からず吃驚した」と述べたうえで、「其等に比較して日本の女子教育界は甚しく貧弱なるを免れない」としている⁽¹⁵⁾。

総じて成瀬は、この欧米巡遊の旅において、欧米の女子高等教育の発達状況に認識を新たにするとともに、日本の状況を嘆き、さらには自らの、女子大学創設への確信を深めたのであった。

他方、らいてうが、上引後段で「お転婆」云々と述べているのは、帰国後10日もたった3月10日付の『小樽新聞』の^(ママ)記事に依つたものであろう。「成瀬女子大学校長と新しい女—日本の新しい女はお転婆」という見出しを付けたこの記事は、「要するに欧米の女子教育は単に機械的にして之れを我国に比すれば我国は賢妻良母主義を以て専ら人格問題に其根本の基礎を置くといふ点に於て彼の地に於ける女子教育より優れ者あるが如し」と、朝日や読売の記事とは全く逆のことを書いている。さらにこの記事では、「現今我国には所謂新しき女と称するものありて雑誌に筆を取り演説会を開き女郎買杯をなす一部の婦人ある由なるが欧州の女にも多少は其傾向あり(、片桐) されど一般に欧州の婦人は家人と来客との談話中言葉を挟むが如き事はなく米国の女は来客

等に対してはお世辞を振り撒くが如きあるも決して我国の所謂新しき女の如きお転婆なる行動を敢てるものなし」と、帰国早々の成瀬が述べたとは考えられないような談話が載せられている⁽¹⁶⁾。

そもそも『青踏』刊行後の「新しい女」をめぐる動きは、成瀬の欧米出発以後のものであって、成瀬がその事情を十分理解していた訳ではない。この点は、成瀬自身の署名入りで掲載された以下に紹介する雑誌記事で、成瀬自ら断っているとおりである。

らいてうが「野次馬の卑しい言葉」等々と難じた記事は、「新しい女」批判に便乗する新聞社の意向が、過度に強調されたものなのである。

3. 成瀬仁蔵の「新しい女」

欧米巡遊の旅から帰国した成瀬は、改めて当時、女性問題を積極的に取り上げていた『中央公論』に、以下のような署名入りの文章を投じた。これらはいずれも1～2頁の、短いものであるが、『成瀬仁蔵著作集』(全3巻、日本女子大学、1974-1981)には収録されていないので、やや詳しく紹介しよう。

まず、『中央公論第廿八年春季附録号』(1913.4)に掲載された「欧米婦人界の新傾向」である⁽¹⁷⁾。

成瀬は冒頭次のように述べた。

私は欧米各国を歴遊して各大学を訪ひ、教育界の名士と互に教育の根本に関する意見を交換して、女子高等教育を視察する傍ら、所謂婦人参政権論者の実際に就いても目撃し、其事情をも些か知ることを得たやうに思ふ。

その上で成瀬は、次のように記した。少々長いがそのまま引用しよう。

此(女性参政権・片桐)問題の因つて起る所は深く、一言にして盡すことは出来ないが、要するに婦人が男子から自由を要求する運動である。従来の女子は男子に比して一般に劣る者と考へられてをつたが、近來女子教育の發達は必ずしも女子が男子に比して劣る者ではないといふ事を証拠立てるやうになつて來た。そこで女子の理想、女子の希望といふやうなもの之

を社会に実現し度い。例へば家庭といふものに対しても斯うあり度い、斯うあらねばならぬといふ女子の要求を満足さし度い。然しながらさうした要求を満足さす為めには女子も男子と同等の權利を有つて社会的に働く必要がある。婦人の能力が男子に比して必ずしも劣つてはゐないのに、婦人の理想、社会に対する婦人の要求が少しも容れられないのは不公平である。此自由を獲ん為めに一即ち彼等婦人の理想とする社会の進歩發達、家庭の改善等それらの目的を達せんとする謂はゞ手段として参政権運動は起つたのである。婦人も男子と同じく参政権を得(、片桐)男子と同じく意見を發表して社会人類の貢獻に資する所があり度いといふ主旨に外ならない。社会に対して男子の思ひ及ばぬ女子の理想なり要求なりをも容れて、お互に協力して以て社会の進歩改善を図らうといふのが彼等一派の願である。(傍点・片桐)

ここに述べられた女性参政権に対する成瀬の見解は、のちにらいてうが積極的に取り組む新婦人協会の活動を先取りしたものであって、きわめてまっとうな女性認識に基づくものであった。

そのうえで成瀬は、「現今日本に起りつゝある所謂新しい女の一派」について、「暫らく日本の事情に遠ざかつてゐた私には近頃那辺まで進行して來てゐるかは解らぬが」とか、「それが果して彼等の真相であるか否かを詳にせぬから、立ち入つた批評は出来ぬが」とか幾度も断りつつ、「種々伝えられるやうなことは、是れは要するに一種の病的な狂的な現象であらうと思ふ」と、述べたのであった。

この後段の成瀬の表現をとらえて、堀場清子は、「この女子高等教育のパイオニアが「新しい女」に向けた理解の通俗性は信じ難い。」としたうえで、「そこで使つた「病的狂的な現象」といった形容に、ほかならぬ成瀬の口から出たがゆえに、私はこだわる。「性」への露骨な侮辱は、女の好ましくない動きを封殺する常套手段だった。」と述べた⁽¹⁸⁾。

しかし成瀬は、この文章の結語の部分で、次のように述べるのである。

一時的病的の發作ならは須臾にして旧に復するであらうし、これが為めに健全な發達を遂げた

女子が動かされるやうなことがあるべき筈もないから、さして憂ふるに足らないと思ふ。私は日本の女子が十分に実力を養ひ、深い根柢の上に立つて真摯なる努力を致すことによつて、自らその占むべき婦人相当の地歩を占めるやうになることを希望するのである。

以上のような全体の文脈を考慮するならば、堀場の指摘は、一部の表現をとらえた、偏った見方、だと言えるだろう。

さらに成瀬は、同年の『中央公論』6月号の「婦人界の新思潮に対する官憲の取締」と題する特集に「罪の一半は女子にもあり」という一文を寄稿した⁽¹⁹⁾。その冒頭は次のようなもので、その趣旨は、上引の一文と同じである。

世界の文明は常に新しい運動に依つてあらゆる方面に進化し発展してゐるのである。新しい運動そのものは決して之を排斥すべきものでないのみならず、大に歓迎すべきものであらうと思ふ。その意味に於いて今日日本に起れる新しい女の運動を一概に排斥するのではないが^(ママ)。只彼等は余りに極端に奔り常軌を逸してをるの嫌ひがある。極端なものと言つても、それか真摯誠実な、衷心からの主張である限り、亦素より其の孰れの点にか一部の真理が有るものである。彼の自然主義の如きも解し様に由ては絶対に排斥し去ることの出来ない一部の真理を有してをる。然しながら極端に奔るものは、概ね一時の反動的激情に基くもので、病的傾向と相件ひ、若くは之が結果たり、或は之が原因となるものが多い。従つて運動の中心と成り、社会を導く要素とはなることが出来ない。今日日本の所謂新しい女の主張や行動に就いてはまだ詳しく知る機を得なかつたが、新聞や雑誌に散見する限りに於ては、矢張り病的現象の性質を多分に持つて居るものであつて新運動の中心と認めることが出来まいと思ふ。(傍点・片桐)

そのうえで成瀬は、次のように述べている。

私は新しい運動を起さうとする婦人に対して、他を動かさんとする前に、先づ女としての自己

の品格実力を養はんことを勧告し度い。状態の改善は決して冷め易い一時の興奮によつて出来るものではない。

さらに成瀬は、同年7月発行の『中央公論』臨時増刊・婦人問題号に、「人、女、国民としての教育」という短い談話を載せた⁽²⁰⁾。ここでは成瀬は、年来の主張である女子教育の三つの方針、「人としての教育」「女としての教育」「国民としての教育」を挙げたうえで、次のように述べた。

女は妻であり母である前に先づ人で無ければならない。女も男と同じく人である以上、男と同じく人としての教育を受けねばならぬ。然しながら女は何処までも女である。男の為すべき任務とそこに自ら区別せられたる任務を有する。彼の新しき女の主張が往々にして男女の差別を無視せんとするが如きは思はざるの甚だしきものと言はねばならぬ。最後に女といへども之を国家より見れば国民である。国家に生存する以上は女も国民としての任務を有しなければならぬ。吾等は此見地よりして女子教育を掌るものである。是れ即ち女子教育の根本方針と言つてよからうと思ふ。

ここに述べられた女性観は、のちに述べるように、らいてうのものでもあった。

4. 『青鞥』の休刊—自己探求から社会改造へ

1913年10月、創刊2周年を期して青鞥社は社則を変更した。第一条に「本社は女流文学の発達を計り」とあったのを、「本社は女子の覚醒を促し」とした。『元始』が言うように、女性文芸雑誌から本格的な女性問題誌になったのである⁽²¹⁾。

しかしこの変更は、女性文学者等の、これまでの支持者を失うことになり、『青鞥』の発行部数は下降線に向かった。

らいてうは、1914年1月、女性にとって差別的な婚姻制度に抵抗して、結婚届を出さぬまま、5歳年下の画学生・奥村博との共同生活に入った。5月、『青鞥』発行の実務に疲れた保持研は去った。

かくして、編集・発行の実務の一切がらいてうにのしかかり、らいてうは自宅に青鞥社の事務所を置くようになった。これはらいてうにとって、大きな負担となった。らいてうは、心身ともに疲れ、留守中の編集実務を、12年10月に入社した若い伊藤野枝に依頼し、奥村と共に、千葉県御宿海岸に静養のため向かった。

この地が気に入ったらいてう夫妻の御宿滞在は長くなった。15年1月、ついに、『青鞥』の発行権を伊藤野枝に譲ることにした。

同年2月、御宿を引き払って帰京したらいてう夫妻は、小石川区西原町に住み、さらに四谷区四谷伊賀町に転居した。この間、のちに、いわゆる母性保護論争で同じ立場に立つ山田わか^{あつみ}の夫・山田嘉吉のサークルで、かねてから気に掛けていた社会学を学んだ。この時学んだのは主として、当時日本でも注目され始めたアメリカ社会学の祖とされるレスター・フランク・ウォードの社会学であったが、この経験は、らいてうの眼を、自己から社会へも向けさせることになった。それは、奇しくも、神学上の研究で渡米した成瀬仁蔵が、アンドーヴァー神学校で師事したタッカー教授から社会的視点を学んだのと同じ軌跡を辿った、という意味でも重要であった。

その後らいてうは、結核を発症した夫・奥村に付き添って茅ヶ崎に転居し、さらに滝野川町（現・東京都北区）上中里に転居した後、1918年初め、同町田端に居を構えることになった。この間、長女・曙生^{あつみ}と長男・敦史^{あつみ}が生まれ、両親との和解が進行し、その援助で田端の家を買い取ったのだった。

1916年2月、『青鞥』はついに無期休刊となった。発行権を持っていた伊藤野枝は、2月号の編集後記に、「来月号からは、今月内には皆様のお手許に届く位に早く編輯いたしますつもりです。何卒、今月号の後れましたことをお許し下さいまし。⁽²²⁾」と書いたが、次の号が出ることはなかった。伊藤野枝は、辻潤も『青鞥』も捨てて、大杉栄の下に走ったのである。

長女の妊娠中、らいてうはつわりに苦しんだ。おまけに、定職を持たない夫との生活の貧困にも苦しんだ。こうした状況は、らいてうに、「女であること」を強く意識させることになった。

らいてうは、与謝野晶子が、エレン・ケイ（1849-

1926）を「絶対的母性中心説」と断じたことを、「甚しい速断—否誤解」と批判し、ケイを擁護して、「過去の婦人問題が一所謂旧き女権論者等の主張の中に含まれてゐる婦人問題が「女よ、人たれ」と言ふことだとすれば、更に進化し発展した今日の婦人問題は「人たる女よ、真の女たれ」といふことではないでせうか。⁽²³⁾」と述べた。

この主張は、さきに紹介した『中央公論』1913年新年号掲載の「新しい女」を受け継ぐとともに、のちの母性保護論争の前哨戦ともなるものであった。

母性保護論争は、与謝野晶子が『婦人公論』1918年3月号に掲載された「女子の徹底した独立」と題する文章において、「私は欧米の婦人運動に由つて唱へられる、妊娠分娩等の時期にある婦人が国家に向つて経済上の特殊な保護を要求しようと云ふ主張に賛成しかねます。」「妊娠の時と分娩の時とに予め備へる財力の貯蓄を持つて居ない無力な婦人が、妊娠及び育児を云ふ生殖的奉仕に由つて国家の保護を求めるのは、労働の能力の無い老衰者や廢人等が養育院の世話になるのと同じことだと思ひます。⁽²⁴⁾」と記したのに対して、らいてうが、同5月号の「母性保護の主張は依頼主義か—与謝野晶子氏へ—」において強く批判したことから本格的に始まった。

母性保護論争は、のちに、前述の山田わかや山川菊栄が参戦することになるのだが、なによりもらいてうにとっては、「母性保護の主張は依頼主義か—与謝野晶子氏へ—」において、「この問題を只婦人一個の個人的な立場からばかり見て是非しやうとしてゐられる与謝野氏の態度」に対して、「婦人の職業教育の奨励、職業範囲の拡張、賃金値上問題等に大に努力せらるべき⁽²⁵⁾」と強く批判しているところに意味を持つ。

このようにらいてうは、この論争を通じて、女性問題を社会的視点から考察する立場を獲得したのである。

らいてうは、1919年の夏、『名古屋新聞』主催の婦人問題講習会の講師として名古屋を訪れ、元名古屋新聞記者の市川房枝（1893-1981）の案内で、愛知県下の繊維関係の工場を見て回った。これは、若い女性たちが働く劣悪な労働現場を実際に見る貴重な体験であるとともに、市川房枝という、らいてうには欠けた、実務的能力を持つ人材を識る重要な機

会ともなった。市川房枝の兄が、在米時代の山田嘉吉の門下生だった、という縁もあった⁽²⁶⁾。

「こうして「青鞥」運動の末期においてわたくしたちが突き当たった壁—社会に、政治につながるところの堅い壁を打ち破るための、婦人の政治的、社会的な団体運動への衝動が、わたくしの中にだんだんと抑えがたいものとなってきました。⁽²⁷⁾」と、らいてうは自伝の『元始』で述べるのである。

5. 新婦人協会の創設—政治へ

かくしてらいてうは、女性参政権の要求を第一に据える新婦人協会結成の構想を練り、1919年11月、大阪で開かれた第1回関西婦人団体連合大会において創立趣意書を発表し、12月末の開会がまちかに迫った帝国議会に間に合わせるために、急ぎ、二つの請願書を起草した。「治安警察法第五条修正の請願書」と「花柳病男子結婚制限法制定に関する請願書」である。前者は、女性の政治結社への加入や政治活動の自由を求めるものであり、後者は性病に罹った男性の結婚制限を求めるものであった。これらの請願は、翌年夏の特別国会で、前者は採択され、後者は否決された⁽²⁸⁾。

その一方、翌1920年3月に新婦人協会の発会式を行ない、10月に機関誌『女性同盟』を発刊するに至った。新婦人協会の事務所は、滝野川町田端のらいてう宅に置かれ、市川房枝と奥むめお(1895-1997)が、らいてうとともに協会の理事となった。奥むめおは日本女子大学校家政学部の出身で、らいてうの後輩であったが、市川房枝が、「なにかと細々しく、神経質で、潔癖で拘泥癖がある」のに対して、奥は、「大まかで、無頓着で、清濁併せ呑むといったタイプ」であった⁽²⁹⁾。

らいてうは『女性同盟』創刊号の巻頭に「社会改造の対する婦人の使命—「女性同盟」創刊の辞に代へて—」を載せた。

この論文は、『青鞥』発刊の辞「元始女性は太陽であつた」で女性解放の狼煙を上げたらいてうが、さらに、それを一歩前進させて、女性による「社会改造」を訴えたものであった、という点で、大きな意味をもつ。

らいてうはここでまず、欧米の女性運動が「生活上の自由の要求」すなわち、「直に法律上の、政治

上の、経済上の乃至は職業上の権利若しくは自由を要求する」のに対して『青鞥』の活動が、「人格上の自由の要求」すなわち、女性の「精神的自由と独立」、言い換えれば、女性自身の「自我の尊厳を悟り、内的自我の解放、内部精神の自由独立」を主張したものであったと総括する。

「^(ママ)原始女性は太陽であつた」の一文に限らず十年前の私が文筆を通じて、我が婦人界並に婦人言論界になした努力は、言ふまでもなく婦人運動の極めて初歩的なもので、「婦人も亦人間なり」といふ数語に尽きるところの所謂婦人覚醒の第一声に過ぎませんでした。しかも欧米に於ける初期の婦人運動がこの同じ見地から「それ故に婦人も亦男子と同一の権利を享有し、男子と同一の生活を享樂する自由を有す」として直に法律上の、政治上の、経済上の乃至は職業上の権利若しくは自由を要求するに反し、当時の私は寧ろ是等の要求を外的なもの、部分的なもの、枝葉的なものとして、ひたすらに精神的自由と独立とを高調いたしました。即ち「婦人は只外的な生活に於ける自由や独立や権利を要求するよりも、否それに先き立ち第一に婦人自身が自分自身にかへり、自我の尊厳を悟り、内的自我の解放、内部精神の自由独立を有たねばならぬ。」と⁽³⁰⁾。(傍点・片桐)

その上でらいてうは、「ところがこの一種の精神運動が在来の（そして今日の）道徳、習慣に対する懷疑となり、更に反抗となつて、外部に現はれた時、所謂「因襲打破」の形をとつて現はれたとき、私共の心は常に高き宗教的情熱に充たされてゐたにも拘はらず、最も卑俗な立場から、予期した通りの、否予期以上の愚劣な、そして醜惡な侮辱と、嘲笑と、悪罵と、非難と誤解とを受けねばなりませんでした。⁽³¹⁾」と述べた。

そしてらいてうは、さらに、欧米の運動が「生活上の自由」を、日本の運動が「人格上の自由」を要求したという違いはあったにもかかわらず、「いづれもが女性としての婦人を無視してゐた」という一つの共通点があった、と自己批判する。

らいてうは「これは或意味に於て正しく男性への女性の最も完全なそして最も根本的な降服でありま

す。⁽³²⁾」と述べ、結論的に、次のように記した。

この時に於て、このよき機会の到来した時に於て、私共婦人は自から立つて女性の世界の理想により、要求によつて社会改革の事業に参加せざるゐられませうか。今こそ婦人は女性としての特性を社会改造の上に十分發揮すべき時なのです⁽³³⁾。(傍点・片桐)

らいてうらは、1920年11月刊行の『女性同盟』第2号に、治安警察法第五条修正の請願をさらに前進させて、女性の参政権を要求する「衆議院議員選挙法改正に関する請願書」を掲出した。これは同年12月開会の帝国議会に間に合わせるためであった。この請願は、日本において、国会に提出された初めての女性参政権要求となった。

これらの活動は、それを待望する女性たちに強い反響を呼び、新婦人協会の地方支部結成の動きにつながった。らいてうらはこれに応じて中部、関西、中国等を飛び回ることになったが、同時に、広島県のように、女教員の政治参加を恐れる当局が激しく弾圧した地域もあった⁽³⁴⁾。

しかし対議会運動やこれらの活動は、幼な子二人を抱えるらいてうの生活にとって、大きな負担になった。

新婦人協会の事務所になった田端のらいてう宅には、市川房枝が住み込んだ。そしてらいてうらの運動に対して非協力に見える夫・奥村と市川との感情的対立が生じた。やがて市川は、在米の兄を頼って渡米した。

協会の内部自体にも、運動の方針をめぐる対立が生まれた。対議会運動は、1922年5月の治安警察法第5条改正という成果を生んだが、このような対議会運動に対して、むしろ労働運動や社会運動と連携すべきだとの主張も強くなった。これは社会主義的な女性運動の芽生えによるものでもあった。

このような公私とも生じた混乱は、らいてうの心身を疲弊させ、健康を損ねさせた。

1921年夏らいてうは、縁あって千葉県内房の竹岡海岸に子どもたちを預けることにし、自らもここで転地静養することにした⁽³⁵⁾。そして同年冬には、田端の家を他人に貸して運動の第一線から退き、家族で栃木県那須郡佐久山町(現・大田原市佐久山)

に移住した。

1922年12月、新婦人協会は解散した。らいてうの健康は回復せず、また協会内部の意見の対立も解消しなかったためである。らいてうは、解散を決意するに至る経緯を具体的に記した長文の「ご挨拶」を発表した⁽³⁶⁾。そこには、「現在の日本婦人が、団体生活の訓練のないのに全く失望した、今日ほど団結の必要に迫られているときにはないのに、婦人の心の中には団結を破壊し、団体を分裂させようとする要素ばかり異常に発達しているのではないかとおもわれるのは遺憾である⁽³⁷⁾」などのことが述べられていた。

機関誌『女性同盟』も、この月、全16号で終刊となった。

『女性同盟』創刊の辞において、いまこそ女性は「女性としての特性を社会改造の上に十分發揮すべき時」と述べたにもかかわらず、女性の心の中に「団結を破壊し、団体を分裂させようとする要素ばかり異常に発達している」などと述べねばならぬとは、いったいどうしたことか。らいてうは、暗澹たる挫折感を味わねばならなかった。

この事実は、前稿で述べたように、まさしく成瀬仁蔵が、らいてうの学生時代に、「人は何故に社会的ならざるを可らざるか」という講話を行ない、人間には「社会的能力」があり、これを発達させることが重要だと、熱っぽく語っていたことを想起させる。

そして成瀬が、1904年の、卒業組織・桜楓会創設時に、「会といふ様な団体には凡て犠牲的精神が必要である⁽³⁸⁾」と説いたのに対して、成瀬宛てに提出した、「団体」と題した答案で、「我ハ団体ノ思想傾向ト已レト到底一致シ難キヲ覚エタリ、友ガ満足シツ、アルモノモ我ハ満足シ得ザルナリ」などと記していたこと(前稿参照)を、もし、らいてうが記憶しているとすれば、痛恨の想いで、その苦さを噛みしめたことであろう。

6. 「母としてのよろこび⁽³⁹⁾」―「自然」へ

1922年初秋、らいてう一家は、佐久山から塩原温泉に転地し、初冬、いったん帰京し駒込の実家に滞在した。この年12月に新婦人協会を解散してから、さらに神奈川県伊豆山で冬を越し、4月、千

駄ヶ谷の路地裏の借家に落ち着いた。

21 年夏から 23 年 4 月までの、都会を離れた 2 年近くになる農村等での地方暮らしは、疲れきったらいてうの心身を癒す大切な時間となるとともに、子どもたちと一緒に自然と触れ合う、貴重な機会ともなった。

子どもたちは、当時牛込にあった、沢柳政太郎創設の成城小学校に入学させた。「ブルジョア的」との批判を意識して、らいてうはその理由を、「わけでもわたくしの気に入ったことは、あのいやな国定教科書を使はないといふことなどでした⁽⁴⁰⁾」と記した。そして成城小学校が砧村（現・世田谷区成城）に一部移転すると、京王線千歳烏山駅に近い千歳村烏山に転居し、子どもたちはここから徒歩で通学した。当時、小田急線はまだ開通していなかった。夫・奥村は成城学園の絵画の教師を引き受け、同時に演劇部を創設しその指導にも当たった。奥村が成城学園教師になったことにより、安定した収入が得られ、子どもの学費が無償となった。

烏山も自然豊かな土地であった。同地在住で、のちに野鳥の会を主宰する中西悟堂と知り合い、その木食生活に魅せられた。らいてうの自然認識は、こうしてさらに深まった。

らいてうは、新婦人協会の運動を受け継ぎ 1924 年に結成され、翌 25 年に婦選獲得同盟と改称された市川房枝らの婦人参政権運動に強い関心を寄せ、批判的視点を維持しつつ、これを支持する論陣を張ったが、具体的な活動をすることはなかった⁽⁴¹⁾。

むしろ、らいてうはこの時期、「新女性主義⁽⁴²⁾」を掲げる高群逸枝に強い関心を寄せた。

らいてうは、「わたしは今高群逸枝さんが無性に好きになっています。私の知っている現代の女性の中の一番好きなひとです⁽⁴³⁾」と語る。そして 1930 年 1 月、高群を中心として無産婦人芸術連盟を結成し、機関誌『婦人戦線』を刊行した。

らいてうはこの第 2 号に寄稿した「婦人戦線に参加して」において、「『婦人戦線』は第二『青踏』である」と述べ、「新婦人協会創立時のわたくしは、婦人の立場からしきりに女性による社会改造を叫びながらも、それは結局男性と資本家の横暴と貪欲に只いくぶんの制限を置くことによつて、婦人、母性、児童を保護しやうとする程度のもので」あったとして、さらに次のように述べた⁽⁴⁴⁾。

徒らに男性の争闘本能を刺戟し、階級争闘の激化に努め、資本家階級からその権力を奪取せんとする運動とは違ひ、階級意識の上に立つてはゐても、争闘によらず専ら女性の掌中にある最も日常卑近な台所の消費生活を相互扶助の精神により協同の基礎の上に建て直すといふまことに平和な、それでゐて最も具体的な、実践的な手段、方法を通じて、資本主義組織を確実、有効に切崩しつつ同時に協同自治の新社会を建設して行くこの運動こそ女性の生活と心情とに最も相応した、従つて一般女性の立場からなし得られもするし、又しなければならぬ運動である、と思はれるのでした。（傍点・片桐）

らいてうは、1927 年、小田急線が開通した年、奥村が勤務する成城学園の教職員住宅組合の融資を受けて、成城学園のある砧村に家を新築し、そこで消費組合運動に熱心に取り組んだ。「消費組合、我等の家」という名前を掲げた店舗も開き、らいてうは、子育てに従事するかたわら、その運動の中心として活動した。

らいてう自ら語るように、このような協同組合運動への関心は、無政府主義者・クロボトキンの「相互扶助論」の影響によるところが大きかった⁽⁴⁵⁾。

この時期らいてうは、「本能としての協同心の発展—自然的道德について—」という文章で、「近代において人類は三つの大きな発見をした、その第一は個人の発見であり、第二は階級の発見であり、第三は協同社会の発見である⁽⁴⁶⁾」と書き、また、「明日の女性に要求される一つの資格」というアンケートに答えて、「社会意識、すなはち相互扶助的な協同精神。明日の社会は協同の理想によつて建てられたものでなければならず、従つて明日の女性に向つて協同精神が何より先に要求されるのは当然です。⁽⁴⁷⁾」と書いた。

らいてうは、市川房枝らの婦選獲得同盟が推進する婦人参政権運動が、ともすれば、国家権力の一角を担うことによって、女性が、権力に組み込まれることの危険を感じ取ったというべきかもしれない⁽⁴⁸⁾。

他方らいてうは、注 44 の引用で、「女性の掌中にある最も日常卑近な台所の消費生活を相互扶助の精神により協同の基礎の上に建て直す」と述べたよう

に、女性こそ、「相互扶助の精神」を持ち、協同社会建設の担い手になる資格があると主張するのであるが、それは、戦争に突き進む国家権力との闘いに背を向けることでもあった。

このような認識は、らいてうの自然認識の深化とも深く関係しているであろう。らいてうは、この時期出版した随想集の構成を、「自然と生活篇」「母子篇」「婦人と社会篇」の3篇とし、書名を『雲・草・人』とした。ここにもその認識が端的に表れている。

またらいてうはこの頃、玄米食を中心とする「食養」や、手のひらによる「掌波療法」や、足つぼを揉む「足心術」に関心をもったのも、中西悟堂の木食生活に魅せられたことの延長であるとともに、自然認識の深化と軌を同じくするものであろう。

同時にらいてうは、娘に対して「あなたにはまだキリスト教だの、仏教だの、神道だのなんのと言つて別々なものとして見えるのでせう。しかし生命の真理(大道)を見るものにとつては一つです。(49)」と語り、さらに次のようにも述べている。

卅年近くも前に、わたくしの精神上的の恩師、故成瀬仁蔵先生は、世界宗教の統一運動を起され(たしか婦人協会と言つたやうに記憶しますが)晩年の先生は深く感ずるところがあつたものゝ如く、専らこの運動に精力を傾注されてゐられたやうでありましたが、結局一部の宗教学者間の観念運動以上に発展せずに終りました。今度こそ機の熟したものであることを祈らずにはゐられません⁽⁵⁰⁾。

この宗教観は、「人間教育の根底をなすものは宗教であり、各人に宇宙と我れとの同体的真理を、全体としての生命と個としての生命との相関的事実を、単に理論としてでなく、体験的に、実践的に掴みしめ、人間生活に中心根底を与へるものは、宗教による自覚以外に望み難い事なのです。(51)」との認識に基づくものであり、これは、らいてう自ら認めるように、まったく成瀬仁蔵の宗教観と重なり合うものであった⁽⁵²⁾。

1942年、らいてうは夫とともに、姉一家の別荘があり、父没後の母がすでに住んでいた茨城県戸田井(現・取手市)に疎開した。そして、慣れない農

耕生活に従事し、ここで敗戦を迎えた。

7. 戦後

敗戦を迎えたらいてうは、「国としての独立をはっきり失ってしまったことに対するいいようもない深い悲しみと、憤りのなかで、ポツダム宣言なるものを熱心に、いくども読み返しました⁽⁵³⁾」という。

1947年春、らいてうは6年ぶりに成城の家に戻った。そして翌48年夏に執筆した長文の「わたくしの夢は実現したか」が、戦後初めて書いた本格的な論文となった。この中でらいてうは、新憲法と新民法の公布に感動し、女性の権利が認められ、家制度が廃止されたことを喜んだ。この長文は「わたくしの心は、いまかぎりないよろこびにあふれている⁽⁵⁴⁾。」と結ばれている。

こうしてらいてうの「戦後」が始まった。世界連邦運動に参加し、平和アピール七人委員会のメンバーになった。全面講和を求め、再軍備反対・非武装中立を主張し、ベトナム反戦運動や安保条約延長反対の運動の先頭に立った。全日本婦人団体連合会を結成しその会長に推挙された。

このような、戦後におけるらいてうの社会的活動は目覚ましいものがある。まさにらいてうは、女性平和運動のシンボルとなった。これは成瀬仁蔵が晩年に主張した「デモクラシーの根本精神」に連なるものでもあった。

その一方でらいてうは、公開された「戦後日記」によれば、信頼する姉・孝が熱心に信仰する大本教に理解を示し「宗教とは、独一真神即ち宇宙大精神の御意志を地上に写すことにある⁽⁵⁵⁾」と記し、姉の家に祭っていた「み霊」を成城の家に移し「久しく心にかゝっていたことかようやく出来て、安心した。」と記した⁽⁵⁶⁾。そしてらいてうは、夫・博史を神式の葬儀で送り⁽⁵⁷⁾、自らの諡を「おくりな明^{はるおきなのみこと}嬭之命」とした⁽⁵⁸⁾。

先述したように、晩年のらいてうは、最早、特定の宗教にこだわることはなかった。

長年らいてうを研究する米田佐代子は、「『コロナの時代』を生きる人間の力—2021年平塚らいてう没後50年を前に考える—」という論文の中で、「女性思想家として彼女の全体像はまだ明らかになった

とは言えないのが現実です。⁽⁵⁹⁾と述べている。

これはまた、成瀬仁蔵にも、あてはまることかもしれない。

<注>

- (1) 平塚らいてう『わたくしの歩いた道』(以下『道』)(評論社、1955年)但し本稿では佐伯彰一・松本健一監修『作家の自伝8 平塚らいてう』(日本図書センター、1994年)を使用した。65頁。
- (2) 『道』66頁。
- (3) 同上86頁。
- (4) 同上95頁。以下、本稿では「明」ではなく「らいてう」と記す。
- (5) 平塚らいてう「元始女性は太陽であつた。一青鞥発刊に際して一」(『青鞥』第1号1911.9)37頁。のち『園窓より』(東雲堂書店、1913年)に収録。『平塚らいてう著作集』(以下『著作集』)第1巻(大月書店、1983年)所収。
- (6) 『道』86頁。
- (7) 前掲『青鞥』52頁。
- (8) 青木生子「平塚らいてうと成瀬仁蔵」(『国文目白』第42号、2003年)15頁。
- (9) 平塚らいてう『元始、女性は太陽であった』(以下『元始』)上(大月書店、1971年)338頁。
- (10) 平塚らいてう「新しい女」(『中央公論』1913.1)193頁。のち前掲『園窓より』に収録。前掲『著作集』第1巻所収。
- (11) 同上、193-194頁。
- (12) 平塚らいてう「世の婦人達に」(『青鞥』3巻4号1913.4)159-160頁。のち前掲『園窓より』に収録。前掲『著作集』第1巻所収。
- (13) 同上、160頁。
- (14) 「欧米の新しい女一成瀬女子大学校長帰朝」(『朝日新聞』1913.3.4)
- (15) 「欧米の女子教育一女子大学長成瀬氏の土産談」(『読売新聞』1913.3.4)
- (16) 「成瀬女子大学校長と新しい女一日本の新しい女はお転婆」(『小樽新聞』1913.3.10)
- (17) 成瀬仁蔵「欧米婦人界の新傾向」(『中央公論』1913.4)187-189頁。
- (18) 堀場清子『青鞥の時代』(岩波新書、1988年)174頁。
- (19) 成瀬仁蔵「罪の一半は女子にもあり」(『中央公論』1913.6)74-75頁。
- (20) 成瀬仁蔵談「人、女、国民としての教育」(『中央公論』臨時増刊・婦人問題号1913.7.15)87頁。なおこの号の「人物評論」欄には「平塚明子論」が掲載され、佐藤春夫、馬場孤蝶、与謝野晶子らが文章を寄せている。
- (21) 『元始』下(大月書店、1971年)503頁。
- (22) 「編輯室より」(『青鞥』第6巻第2号1916.2)90頁。
- (23) 平塚らいてう「母性の主張に就いて与謝野晶子氏に与ふ」(『文章世界』1916.5)81.83頁。のち「母性の主張に就いて」と題して『らいてう第三文集・現代の男女へ』(南北社、1917年)に収録し、さらに「主張に就いて」を「尊重に就いて」と改題して『女性の言葉』(教文社、1926年)に収録。なお『著作集』第2巻(大月書店、1983年)所収。
- (24) 与謝野晶子「女子の徹底した独立」(『紫影録』『婦人公論』1918.3)37-38頁。
- (25) 平塚らいてう「母性保護の主張は依頼主義か一与謝野晶子氏へ」(『婦人公論』1918.5)21.23頁。のち前掲『女性の言葉』に収録。但し若干字句が訂正されたところがある。『著作集』第3巻(大月書店、1983年)所収。
- (26) 『元始』完(大月書店、1973年)39頁。
- (27) 同上、38-39頁。
- (28) 同上、118頁。
- (29) 同上、126頁。
- (30) 『女性同盟』創刊号(1920.10)3頁。前掲『著作集』第3巻所収。
- (31) 同上、4頁。
- (32) 同上、6頁。
- (33) 同上、10頁。
- (34) 『女性同盟』第4号(1921.1)は「広島県当局の女教員圧迫事件顛末」の特集を組み、これを詳しく報じた。
- (35) 前掲『元始』完、199頁。
- (36) 同上、205-210頁。
- (37) 同上、205頁。
- (38) 成瀬仁蔵「研究を以て本務とせよ」(『日本女

子大学校桜楓会会報・花紅葉（以下『花紅葉』）第1号（桜楓会、1905.5.14）56頁。
『成瀬仁蔵著作集』第2巻（日本女子大学、1976年）所収。

- (39) 前掲『元始』完、最終章の表題。
- (40) 平塚らいてう「子供を成城小学に入れたことについて」（『婦人之友』1926.3）37頁。『著作集』第4巻（大月書店、1983年）所収。
- (41) 平塚らいてう「婦選運動者へ—全婦選団体よ、婦選をその綱領に掲げたる無産政党を応援せよ—」（『東京日日新聞』1928.2.6）。前掲『著作集』第5巻（大月書店、1984年）所収。
- (42) 高群逸枝『恋愛創生』（万生閣、1926年）の「巻頭に」で、高群は、女性問題は、「女権主義、女性主義、新女権主義、新女性主義」の順で展開したとして、「新女性主義こそ、世界に対して、日本婦人のする、最初の提唱であろう」と述べている（1-3頁）。
- (43) 平塚らいてう「高群逸枝さん」『雲・草・人』（小山書店、1933年）248頁。前掲『著作集』第4巻所収。なお、らいてうと高群の関係については、堀場清子「らいてうと逸枝—終生にわたる深い共感と連帯について—」（『平塚らいてう研究会紀要』第4号、2011年）がある。
- (44) 平塚らいてう「婦人戦線に参加して」（『婦人戦線』第2号、1930.4）38頁。前掲『著作集』第5巻所収。
- (45) 前掲『元始』完、264頁。
- (46) 前掲『著作集』第5巻229頁。巻末の「解題」によれば「初出不明。らいてうによって「1930年」と記されてある。」とのこと（395頁）。
- (47) 平塚らいてう「明日の女性に要求される一つの資格」（『婦人之友』1931.1掲載のアンケートの答え）。前掲『著作集』第5巻所収。
- (48) 婦選獲得同盟は国策遂行に協力することになり、1942年、結局、大日本婦人会に統合され、翼賛体制に組み込まれた。
- (49) 平塚らいてう「私の娘時代」（『婦人公論』1935.5）90頁。「娘に母の娘時代を語る」と題し『著作集』第6巻（大月書店、1984年）に所収。
- (50) 平塚らいてう「先づ万教和協せよ」（『時事新報』1936.4.26夕刊）。同上所収。
- (51) 同上。
- (52) なおらいてうは晩年に孫に向っても「宗教は、どの宗教も、最後は同じなのよ」と語ったと言う（奥村直史『平塚らいてう—その思想と孫から見た素顔—』（平凡社ライブラリー、2021年）213頁）。
- (53) 前掲『道』237頁。
- (54) 平塚らいてう「わたくしの夢は実現したか」（『女性改造』1948.10）9頁。『著作集』第7巻（大月書店、1984年）所収。
- (55) 1955年9月4日の項（「平塚らいてう『戦後日記（1953-58）』」（『平塚らいてう研究会紀要』第12号（2019年）51頁）。
- (56) 1956年11月9日の項（同上、41頁）。
- (57) 奥村直史・前掲書、212頁。
- (58) 大塚英良『文学者掃苔録図書館』（原書房、2015年）195頁。
- (59) 米田佐代子「「コロナの時代」を生きる人間の力—2021年平塚らいてう没後50年を前に考える—」（『平塚らいてうの会紀要』第13号、2020年）41頁。

（本稿は2023年11月17日の日本女子大学生涯学習センターにおける講話をもとにしたものである）